

大学生のコミュニケーション能力育成のための 臨床心理学的カリキュラムの開発 (3)

— 大学生の Web 調査からみる大学生活におけるコミュニケーションに関する経験と自己概念との関連 —

○山本文枝¹・西まゆみ¹・藤沢敏幸¹・船津守久¹

(¹安田女子大学心理学部心理学科)

問題と目的

人は誰しも少なからずコミュニケーションに難しさを感じている。本研究は、互いの個性を尊重し人間関係を築くためのコミュニケーション能力を育成する支援を大学の授業に取り入れることについて検討している。社会性の発達障がいである自閉症スペクトラムのグレーゾーンにいる大学生は、人間関係に困難さを感じながらも、学生相談などの支援につながらないまま学生生活を送っていると考えられることから、大学の授業で間接的な支援となることねらいとしている。特に、発達障がいによる2次障害の問題に配慮し、コミュニケーションスキルの向上及び行動及び、自己概念の肯定的変化をねらうことにも視点をおく。実態調査から、大学生の自閉症スペクトラム傾向と自己概念、コミュニケーションに関する経験との関連について検討を行った。本稿では、コミュニケーションに関する経験について、主に授業中の発言や話し合いにおける行動の主観的評価をもとに分析を行った。

方法

調査対象者：定期継続的に3回調査協力した大学生87人(1回目978人, 2回目187人, 3回目87人)。授業の一部を用いて、調査者がWeb調査の案内文を配布し協力を呼びかけて募集した。

調査時期：2016年11月～2017年2月

調査方法：Web調査(調査会社に依頼して画面を作成し、セキュリティの高い方法で匿名データを得た)。回答形式は選択形式と自由回答形式の混合であった。Web調査への回答は1カ月おきに連続3回であった。調査方法および分析方法について安田女子大学倫理審査委員会の承認を得た(受付番号160010)。

調査内容：①自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版(50項目, 4件法に修正)(若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004)(1回目のみ), ②同性の友人と一緒にいるときの自己概念：榎本(2002)で用いられた形容詞(45項目), ③コミ

ュニケーションスキル尺度 ENDCORES(藤本・大坊, 2007)(20項目), ④実際のコミュニケーション行動の質問項目(ENDCOREsをもとに作成した20項目), ⑤大学生活における主な活動経験に関する質問項目(授業, サークル, アルバイト)であった。本稿は, AQと自己概念, 授業中の発言や話し合いにおける行動の主観的評価との関連について報告した。

結果と考察

1回目の全体人数978人のデータで自己概念の形容詞45項目の因子分析を行い6因子を抽出した。社交性(お調子者, おしゃべり他, $\alpha=.86$), 非主張性(内気・くよくよする他, $\alpha=.78$), 強情性(短気・がんこ他, $\alpha=.79$), やさしさ(やさしさ・面倒見がよい他, $\alpha=.76$), 非行動力(意欲的・行動力のある他, $\alpha=.60$), 楽観性(めんどくさがり・いいかげん他, $\alpha=.50$)と命名した。3回とも協力した87人を対象に相関分析をした結果, 授業発言や話し合い行動の主観的評価とAQには相関がみられなかった。一方, 授業発言と話し合いでは, 自己概念との相関に違いがみられた(Table 1)。

Table 1 AQ、自己概念、授業中の発言や話し合い行動の主観的評価の間の相関(1回目調査から)。

	AQ	授業発言	話し合い
AQ	—		
授業発言	-.174	—	
話し合い(授業)	-.164	.494 **	—
社交性	-.264 *	.415 **	.165
非主張	.429 **	-.221 *	-.181 +
強情性	.167	.068	-.055
やさしさ	-.249 *	.129	.130
非行動力	.387 **	-.394 **	-.261 *
楽観性	.070	.012	-.047

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

引用文献

若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright, S.(2004). 自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版の標準化 心理学研究, 75, 78-84.